

書籍：「無差別殺人の精神分析」を読んで

EU（欧州連合）の死刑廃止宣言（HP「雑学 BN」の書籍等読後感関係（V）、2009.03.20.「裁判員になるということは、…… ①」：参照）のように、死刑制度廃止は世界の流れだが、日本は死刑制度を存続させており、その根拠の一つが「死刑は犯罪に対する抑止力」と云われている。

しかし、近年の無差別殺人事件の報道の中で、「何もかも嫌になった。自殺しても死に切れない。いっその事、大量殺人をして死刑になりたかった。」というような犯罪者の供述を見聞する。

こうした供述報道に接すると、死刑制度は犯罪の抑止力でなくなり、むしろ犯罪増長（？）の要因になっているのではないかとの矛盾を感じ、また、犯罪者は死刑による自らの死を望むために、なぜ見も知らない多数の人を死傷させるようになるのかとの疑問を抱き続けていた。

そうした折、新聞書評欄で大学教授でもある気鋭の精神科医の著書「無差別殺人の精神分析」の出版を知り、早速購読した。

本書は、6件の日米の無差別殺人事件（秋葉原無差別殺傷事件、等）から、各事件の裁判記録、供述、関係書類、等々の犯罪者自身の言葉、関係者の証言の言葉から、「なぜ、『誰でもよかった』のか——？ いったい何が無差別殺人という『最後の一線』を越えさせてしまうのか？ 凶行への飛躍する〈心のメカニズム〉を徹底分析」した著書であった。

如何せん、本書で説明・解説はされてはいるが、専門用語の一つ一つ概念の理解が不十分な自分だけに、よく理解できたと云う自信はない。例えば、「自己愛」、「拡大自殺」、「成熟拒否」、「対象喪失」、「情性欠如」、等々の精神医学分野の語彙。

本書の最後に凶行へ飛躍しないように心の抑止力・留意事項も記載されていたが、本書を読み終えて差し当たって改めて感じたのは、やはり、余りに自らのあるべき姿を規定せずに自らの身の丈相応の生活・生き方に心がける大事さ、見栄を張らずに自らの弱さも口に出す勇気の大事さ、それらを聴いてもらえる人が居る心の居場所の大事さであった。

阿部幸泰 （2009年6月24日記）